＝市史編さん便り＝　【29 号】　令和５年８月７日(月)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

万次郎人生の概観⑤
「帰国の途に就く万次郎・伝蔵・五右衛門」

(１)ハワイへの日本船漂着は、鎌倉時代から既にあった！

寅右衛門のように漂流してハワイに留まった日本人は、それ以前より存在していた。鎌倉時代にあたる正嘉二年(1256)、ハワイ・オアフ島マカプー・ポイントに日本船と推定される船舶が２回にわたり漂着した。ちょうど北条長時(1230―1264)が、 第６代執権として鎌倉幕府を牛耳っていた時代(1256―1264)の出来事である①。

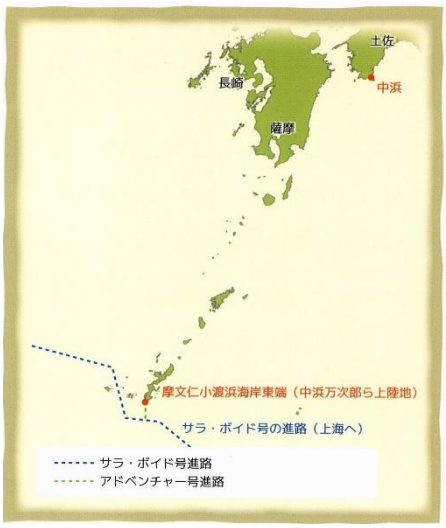
黒潮に流されて八丈島や鳥島等の太平洋上の離島に漂着した記録は、史料にも多く記録され枚挙に暇がない。ハワイに漂着した日本船があったとしても少しも不思議なことではない。鎌倉時代の頃は、コロンブス、バスコダガマ、マゼランといった冒険者たちが活躍した大航海時代以前であり、世界地理も謎だらけで、地球が丸いことさえも証明されていない暗黒の時代であった。この頃、ハワイに漂着した日本船は帰国する方法もなく、ハワイに永住するしか生きる術がなかったであろう。

(２)サラ・ボイド号でホノルルを発ち、琉球へ

万次郎は、フランクリン号で捕鯨の航海をしていた頃から、日本への帰国の方途を探っていたと思われる。鎖国が徹底する中を直接日本に帰国することは危険であった。ワンクッションを置き、薩摩藩が実効支配してはいるが、形式的には独立国である琉球国への上陸をその第一歩と判断した。後に河田小龍によりまとめられた『漂巽紀畧』では、「琉球国ハ□日本ノ南部に在て、帰朝ノ便地之に如く事なし」と記されている。

琉球上陸計画について、万次郎は周到に準備を進めた。万次郎らを日本近海に輸送してくれる船舶は、米国や欧州船籍などのアジア方面と交易している貿易船に便乗するしか方法はない。ハワイは太平洋上の海上交通の要所であり、世界中から貿易船が寄港していた。まず、ハワイに身を置いていることは重要であった。

アジアで貿易が盛んな地域は、マカオ、マニラ、上海、香港などの地域であった。そう考えるとこれらの航路上に近い琉球は上陸地としては、最適の地であった。ただ、異国の貿易船が琉球の港湾に直接接岸されることは琉球や薩摩藩を刺激し、その情報が幕府に漏れる可能性がある。また、万次郎ら３人を輸送する貿易船自体、危険を冒してまで琉球に寄港することは避けたいところだろう。そこで万次郎は、琉球沖合で下船し、ボートで琉球の海岸



↑琉球上陸航路図②

まで行き、上陸する道を選んだ。

ボートの購入にあたっては、ホイットフィールド船長の親友で、万次郎とも交友があったホノルルのデーモン牧師が世話をしてくれた。おかげで英国人が購入したボートと船具一式を 250 ドルで手に入れることができた。万次郎はこれを「アドベンチャー号」と命名した。1850 年 12 月 8 日、上海に向かう茶積船サラ・ボイド号がホノルルに寄港。万次郎ら 3 人はサラ・ボイド号の船長に琉球までの乗船とアドベンチャー号を船へ積載することを依頼し、船長はこれを承諾した。デーモン牧師は、航海に必要な書類一式と米国ハワイ領事に依頼し、万次郎ら 3 人の渡航証明書を発行してもらった。万次郎たちが足摺岬沖で遭難し、鳥島で救助され、ハワイや米国で過ごした経緯がそこに記されていた。

1850 年 12 月 17 日、上海に向かう茶積船サラ・ボイド号が万次郎ら 3 人を乗せてホノルルを出港した。

（３）ハワイからホイットフィールド船長への手紙を出す！

出航前、万次郎は気になることがあった。ホイットフィールド船長のことである。日本帰国のための資金稼ぎにカリフォルニアの金山に行くことは奥さんを通じて断っていた。しかし、行きがかり上、仕方がなかったとはいえ、船長に帰国することを話していなかったことは心に引っ掛かった。そこでハワイ・ホノルルから船長宛に手紙を書いた。

【手紙の内容】

私の幼少の頃より大人になるまで育ててくださったご慈悲は決して忘れることはございません。そのご親切に対して今まで何も恩返しをしておりません。それなのに、今、私は伝蔵と五右衛門とともに帰国しようとしております。恩返しもしないで、このまま帰国する不義理は許されることではありませんが、しかし、世の中は良い方向に変わっていきつつあるので、私たちはいつかまたお会いできると信じております。置いてきた金や銀、また私の衣類は有用なことにどうぞお使いください。私の本や文具はどうぞ私の友人にお分けくだされたくお願い申し上げます。　ジョン・マン

I never forget your benevolence to bring me up from a small boy to manhood. I have done nothing for your kindness till now. Now I am going to return with Denzo and Goemon to native country. My wrong doing is not to be excused but I believe good will come out of this changing world, and that we will meet again. The gold and silver I left and also my clothing please use for useful purposes. My books and stationery please divide among my friends.

John Mung

註

①山下草園『日本布哇（はわい）交流史』大東出版社、1943 年。

②『郷土の先人 日本のとびらを拓いたひと ジョン万次郎』土佐清水市教育委員会(2020)の 19 頁の航路図を転載。

引用・参考文献

・中濱博『中濱万次郎―「アメリカ」を初めて伝えた日本人―』冨山房インターナショナル、2005 年。